

# 北 枝

〒066

千歳市文京1丁目2番地3 ウイング13-510

tel&fax 0123-48-4170 E-mail BZB01141@niftyserve.or.jp

発行責任者 糠塚 たかし

平成8年9月21日

## 小樽の民家に伝わった浮世絵のなかにゴッホ美術館の所蔵品 と同じ作品をみつけて

### 浮世絵でつながっていたヨーロッパと北海道

江戸時代に出版された浮世絵は版画であるので、一つの作品に複数の絵がのこっている。そのなかでも、最初に刷られた200枚を初刷りといっている。

このたび、小樽市の東雲町の民家に伝わった10数枚について研究したところ、そのなかの2枚組みの作品がオランダのアムステルダム・ヴァン・ゴッホ美術館の所蔵の浮世絵(カタログNo.454)と同じ作品であることがわかった。ゴッホ美術館のカタログによると題名は「花勇女水滸傳」、無落款のため絵師は不明、版元は「具足屋」となっており。年代は改め印により明治2年(1869)となっている。サイズは大判1枚で、3枚組みのうちの1枚であろうとの説明があった。

さて、小樽に伝えられたものは2枚組みで右側がゴッホ美術館のもと同じであった。画帖として出版されたかのちに画帳にしたものらしく、綴じひもを通した穴のあとがあり、中折れがある。家人の話によるとこの浮世絵は親族から入手したもので、親族が大正時代にはすでに所有していたと記憶にあるので明治期に入手したのではないか、またこの浮世絵は画帳となっていて一緒に多くの枚数があったが、現在は十数枚となっているとのことであった。1枚は科学染料の入った明治期の色合いの相撲絵であるが、あとは改め印により天保年間(1840年頃)から明治2年(1869)までの作品で、絵師は初代歌川国貞(三代歌川豊国)、二代歌川国貞、歌川国芳、豊原国周、歌川芳艶(初代?)などの歌川派の絵師達の作品である。この「花勇女水滸傳」や芳艶の「當世銘婦伝」などが刷りの状態もよく、入手した年代なども考慮して初刷りの可能性が高い。

江戸で出版された同じ浮世絵が、一方ではヨーロッパへ行きゴッホの手に渡り、一方では明治期までつづいた北前船による交易などで北海道で最も栄えた小樽に渡ったことになり、江戸末期から明治初期において江戸を中心にヨーロッパと北海道が文化的につながっていた事が非常に興味深い。

---

## ジャポニズムと浮世絵

では、なぜゴッホが浮世絵をもっていたかですが。

今年の新春の浮世絵展のテーマにもしましたが、19世紀後半のヨーロッパでは浮世絵を中心とした日本の工芸品により日本の芸術を研究するジャポニズム運動ともいえる文化の大きな波があったのです。

今日のヨーロッパの芸術、たとえばフランスの工芸品や後期印象派の画家たちの作品などの源ともいえます。

ジャポニズムについてはロシアの国立エルミタージュでおこなわれた「ゴッホの愛した浮世絵と歌川正国展」の解説として五井野正名誉博士(雅号・歌川正国)が書かれた印象派の画家達とジャポニズムについての記事がありますので紹介いたします。

従来「ジャポニズム」は“日本趣味”と訳されていたが、は“日本主義”と改められるべきである。そもそも「ジャポニズム」という言葉はフランスの美術評論家、フィリップ・ビュルティが1872年に最初に唱えたもので、“日本趣味”にあたる言葉は「ジャポネズリー」という語句の方が適している。「ジャポニズム」の流行に影響をおよぼしたされているのが1867(慶応3年)と78年(明治11年)のパリ万博となる。

この時、日本は初めての参加で家具や刀剣、武具、陶磁器、彫刻品、鋼鉄製の工芸品等や掛軸書画の他に浮世絵を出品した。この時の浮世絵は四代豊国、三代広重、国周、芳年等歌川派の絵師達の作品であった。この歌川派の浮世絵を除けば、シノワズリー(中国趣味)と大きな差は認められないものである。

当時のフランス絵画はサロンの新古典主義と市民派の写実主義が新旧の対立をしていた頃であるから、浮世絵は圧倒的に現実主義を目指す若手の画家達に新鮮な驚きと自由な発想、そして新しい思想を与えたことであろう。

というのも、これら歌川派の浮世絵がパリを中心にヨーロッパ各地に広がって流布されているからである。

では、パリ万博以前はどうであったかといえば、当時の代表的な美術評論家シュノーの67年以前の『パリの日本』の中でこうかいている。

「導火線にそって燃えて行く火のような早さであらゆるアトリエに波及していった。思いがけない構図、デッサンの知識やテンポの豊かさ。絵画的効果の独創性やその効果の手法の完結さに簡単しない者は誰一人いない。」

つまり、パリ博より11年前の1856年に、印象派の名づけられ親であるモネがこの年(16歳の時)に浮世絵を狂喜して買っているし、またこの年、版画家のブラックモンが印刷所で伊万里の陶器のパッキングに使われていた北斎漫画を発見して、そのデッサンに非常に驚き、印象派の先駆者であるマネに興奮して見せているのである。更に、ドガ、ホイッスラー、ファンタン・ラトゥール、そして前述したビュルティに見せていたのだ。

この9年後の65年にはマネは「オランピア」(オリンピア?)をドガは、「菊のある婦人像」、ホイッスラーは

---

「陶器の国の王妃」をファンタン・ラトゥールは「ル・トースト」をそれぞれ、浮世絵からの影響や日本の生活様式を取り入れた絵画を発表しているのである。この中でもマネの「オランピア」はサロンで一大批判を浴びるが、浮世絵コレクターである小説家、ジャボンザンのエミール・ゾラの理論的擁護の「マネ論」の小冊子の出版によって一大センセーショナルに発展し、ルノワールの「花束のある静物」やセザンヌの「現代のオランピア」など絵画による支援によって、後の印象派と呼ばれる画家達の自由絵画運動につながるのである。

それ故、こうした体制側のサロンに対抗した無力に近い印象派の若き画家たちの擁護者でもあるビュルティはこうした現象を日本趣味という問題ではないという事をはっきり認識する為にも、日本主義の意である「ジャポニズム」という言葉を使ったと見るべきであろう。つまり、パリ万博は「ジャポニズム」の通過点に過ぎなかったのである。そして、印象派が市民権を得るにはこの後、二十年以上の歳月を必要としたのだが、印象派が成功を収める少し前に現れたのがファン・ゴッホである。

ゴッホの「ジャポニズム」(日本主義)は印象派画家の誰より強烈である。弟テオにあてた書簡のなかで「彼等、まるで花のように自然の中で生きていく。こんな素朴な日本人達が我々に教えるものこそ、真の宗教とも言えるものではないだろうか。日本の芸術を研究すれば誰でももっと陽気にもっと幸福にならずにいられないはずだ。我々は因襲的な世界で教育を受け仕事をしているけれども、もっと自然に帰らなければならぬ」と、浮世絵から日本人の思想、生き方まで学びとっているのである。将に日本主義なのである。

ルイ・ルオーの「古典主義がイタリア化でありロマン主義がイギリス化で現実主義がスペイン化であったとすると印象派は日本化というべきであろう」という言葉がマネやゴッホに象徴する印象派画家達の生き方を端的に表していると思えばもう一度、ゴッホとマネの浮世絵コレクションを日本人として日本人の眼で観るべきではないだろうか。

以上 “ 印象派の画家達と「ジャポニズム」 ” (芸術出版社 芸術倶楽部)より

最近では、日本でもゴッホが浮世絵を所有し、模写していたことが一般的に知られるようになった。これも、五井野名誉博士のゴッホの精神面に及ぶご研究や国内外でのご活躍によるところと思われる。

---

## 五井野 正 名誉博士のプロフィール

ごいの ただし

五井野 正

1950年 6月27日 新潟県上越市生まれ

在日本国アルメニア共和国名誉領事

アルメニア共和国国立科学アカデミー名誉博士

アルメニア共和国国立科学アカデミー名誉アカデミシャン

アルメニア共和国国立科学アカデミー工学アカデミーアカデミシャン

アルメニア共和国国立科学アカデミー自然医学研究所顧問

ロシア芸術アカデミー名誉アカデミシャン

「ロッド・ニック」名誉編集委員

ウイッピー総合研究所所長

歌川派門人会会長

ジャポニズム・クラブ (NGO) 名誉顧問

うたがわ しょうこく

画家 [雅号:歌川正国]

著述家・小説家・音楽家・美術評論家・社会運動家・経済評論家・歴史研究家

著書「科学から芸術へ」のプロフィールより